ヴェルビエ音楽祭の《ドン・ジョヴァンニ》

ロシアのウクライナ侵攻直後に、ヴェルビエ祝祭管弦楽団の音楽監督だったヴァレリー・ゲルギエフを解雇したヴェルビエ音楽祭は、オープニング・コンサートほか、3公演の指揮をチューリヒ歌劇場音楽総監督のジャナンドレア・ノセダが代行して7月15日に開幕した。そして、今回の戦争ですっかり有名になったウクライナ人作曲家、シルヴェストロ《ウクライナのための祈り》を演奏したり、ウクライナ人ピアニスト、アンナ・フェドロヴァをソリストに起用したりと、ウクライナ色の強いプログラムに替えられた。

翌日、7月16日にサル・ド・コンパンで上演されたモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》(演奏会形式)は、一流の歌手陣がハイ・レヴェルな演奏を聴かせ、ヴェルビエ音楽祭のレヴェルの高さを見せつける公演となった。もちろんフェスティヴァル用のホールで聴こえるのは見えないマイクに支えられた声であり、室内オーケストラは歌劇場管弦楽団のようなパワーを出せない。しかしそれを、アクセントの効いた演奏でカヴァーするガボール・タカーチ=ナギの指揮は、スター歌手たちがのびのびと実力を発揮できる基礎を整え、支え続けた。

題名役のピーター・マッティは、歳を経ても変わらない甘い響きで聴衆の耳も誘惑する。ドンナ・アンナのオルガ・ペレチャッコもあいかわらずの上昇パワーで、1曲目のアリアなど、「この役はまだ重すぎる」と思われる箇所も気力で歌いきった。ドンナ・エルヴィーラをマグダレーナ・コジェナーがどう歌うのか興味があったが、メゾの強みの低音を激しい感情吐露に生かし、高音は上手く処理して、さすがの音楽作り。夫君サイモン・ラトルも開演前に楽屋を訪れ、アトリエ・リリック・アカデミー合唱団の歓声を浴びていた。ボグダン・ヴォルコフは完璧なドン・オッターヴィオを聴かせ、貴族の役柄としても、音楽的にも当夜の公演に品格を与えた。ファトマ・サイドも理想的なツェルリーナを演じ、その歌声と甘く自然な色気は、マゼットだけでなく観客をも魅了する、「村娘」以上の存在感を見せた。マゼットを好演したジュリアン・ヴァン・マレーツを含む、オペラ界の将来を担うだろう若手3人と、大御所3人を一度に聴けたことに感謝の気持ちすらわく。アレクサンドロス・スタヴラカキスは、マイクの助けもあろうが、余裕の威厳でコンメンダトーレを歌い切った。レポレッロのミクヒル・ペトレンコだけが一流の器ではなかったが、それでも重要な役割を十分はたして大喝采を浴びた。総じてオーケストラの響きに溶け込むような歌い出しが際立ち、全曲を通してアンサンブルの精度を上げていた。

ここ数年、当音楽祭の常連となった藤田真央は室内楽とソロリサイタルのほか、ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第1番」でマルタ・アルゲリッチの代役を任されたり、世界デビュー・アルバムのお披露目イヴェントも開催されたりと、勢いを見せる。ケント・ナガノと児玉麻里夫妻のベートーヴェン「ピアノ協奏曲」共演や辻井伸行リサイタルもあり、日本人の活躍が目立った。

ヴェルビエ音楽祭の《ドン・ジョヴァンニ》から ⓒ Nicolas Brodard

ノセダの初シーズンを締めくくる2演目

2021／22シーズンからチューリヒ歌劇場音楽監督を務めるジャナンドレア・ノセダが再演2作を指揮し、今期の新演出2作よりも実力を発揮した。7月3日に所見したヴェルディ《ファルスタッフ》は笑いとメランコリー、哲学が次々と示唆される機微を細やかに表現し、最高の演奏だった。題名役のブリン・ターフェルは2011年の初演時よりも、イタリア語の歌詞を隅々まで際立たせ、声楽的に困難を見せた箇所も克服し、緻密な研鑽のあとを覗かせた。アリーチェのイリーナ・ルングはイタリア的な歌唱でありながら、初演時のパルパラ・フリットリのように主張しすぎず、メグのニアム・オサリヴァン、クィックリーのマリアンナ・ピッツォラートとバランスのとれたアンサンブルを聴かせた。フォードは若手専属歌手コンスタンティン・シュシャコフで、若すぎるきらいはあっても美声が心地よい。フェントンのシリル・デュボワは、フランス的すぎる声を表現力でカヴァーして甘い恋人役を好演した。脇役も全員が適役だったが、ナンネッタ役のサンドラ・アマウィだけが、彼女の声を生かせなかった。息が流れないため音程がぶら下がる箇所も多く、声のフォーカスが絞れていないため、ナンネッタの存在意義である「純粋な若い響き」が一度も聴けなかった。ズヴェン・エリック・ベヒトルフの演出は11年を経てタイミングが上手くいかなかった部分もあったが、この演奏で隅々まで堪能できる作品となった。

7月6日のワーグナー《トリスタンとイゾルデ》は、「前奏曲」はカクカクしたまま終わってしまったが、トリスタンのミカエル・ヴェイニウスの美声には惚れ薬がなくても恋に落ちそうだ。カミッラ・ニールントのイゾルデも無理なくクレッシェンドできる柔らかい声で、彼らが恋に落ちるとオーケストラも甘くなった。彼らの情熱的な二重唱はクラウス・ゲート演出のヴェーゼンドンク邸という設定も受容させ、第3幕への前奏曲も美しい音のバランスと音色を聴かせた。